

県内でも治療・助成広がる

徳島県内でも不妊治療は増えている。特定不妊治療(体外受精と顕微授精)を対象にした県の助成制度の利用件数は年々増え、2015年度は前年度比17%増の849件。04年度の制度創設以来最多となっている。

経済的負担の軽減へ、独自に上乗せ助成を行う市町村も増えている。県の助成

20万円を上限にプラスするなどの、上乗せしている。また、県の制度は国と県が半分ずつ助成する形だが、県は単独で受精卵や精子の凍結保存料に対する助成も行っている。ただ、いずれも妻が43歳未満の夫婦に限定され、通算助成回数は6回(初回申

不妊治療負担ずしり

社会進出・晩産化で増加

女性の社会進出や晩産化を背景に、不妊に悩む人が増え続けている。5・5組に1組の夫婦が検査や治療を受けたことがあるとされ、不妊治療はもはや身近な存在となった。

一方で、高額な治療費や仕事との両立などに苦しむ女性は多く、苦悩を抱えながら孤独に治療と向き合っている現実がある。不妊治療の現状を探った。

「子どもの頃から、熱も出さないほど元気なのに」。県央部に住む40代前半の女性は40歳を前にしたある日、産婦人科で不妊治療を勧められた。体質と年齢がその理由だった。帰宅後、我慢していた涙が一気にあふれ出した。周囲は自然に授かる人が多く、「まさか私が」と衝撃は大きかった。

妊娠しづらいと周りに知られたくなくて、今でも一部の人にしか言っていない。夫と2人で時間をやりくりして1年以上通院しているが、望む結果はまだ得られていない。「こんだけしてるのになんて? 時間がない」。焦りだけが募る。

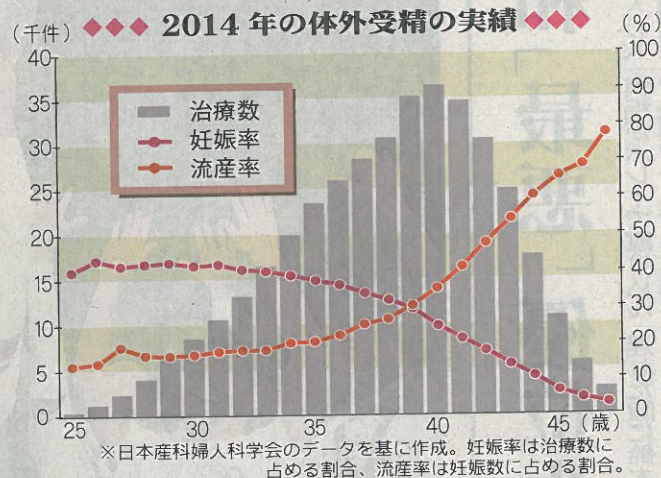
増える体外受精児

生殖年齢の男女が妊娠を希望し、避妊をせずに夫婦生活を送った場合、1年で80%、2年で90%が妊娠するといわれている。日本産科婦人科学会

保険外で費用高額 ■ 連日通院の必要も

不妊の原因には▽生理不順や無月経などの排卵因子▽卵管が詰まる卵管因子▽無精子症や精子の運動率が低い男性因子などが挙げられる。このほか原因不明も半数を占める。原因の割合は男女ほぼ同じとされる。

2人はいれる計算になる。妊娠率 加齢で低下



体験談を募集

後日、不妊や不育症に悩む夫婦の事例から必要な配慮や支援について考える連載を予定しています。ぜひ体験談やご意見を16日までに寄せてください。掲載する場合は確認の問い合わせを致します。

取材をさせてもらうこともございますので、氏名や連絡先の明記をお願いします。宛先は〒770-8572 徳島新聞「きらり阿波女」編集室。ファクス 0120(333)414、電子メール <kirariawa@topics.or.jp> でも受け付けています。

超音波画像を見せながら説明する桑原准教授⑤
—徳島大学病院 (秋月悠撮影)



厚生労働省の人口動態調査によると、日本の女性が発見された年齢は平均年齢は30・7歳(徳島県は30・0歳)。ここ20年間で約3歳上がった。晩産化が進むにつれて、体外受精の需要も増え、2014年に行われた体外受精で生まれた子どもは過去最高の4万7322人となった。04年の約2・5倍。統計上は21人に1人が体外受精で生まれ、クラスに1人、

不妊治療のステップ

- 1 タイミング法
医師が性交の時期を指導する。
- 2 排卵誘発
内服薬や注射で排卵を促す。
- 3 人工授精
精子を人工的に子宮内に注入する。
- 4 体外受精
卵巣から取り出した卵子と精子を体外で受精させ、受精卵を子宮内に戻す。

不妊治療にはさまざまな方法「別表」があるが、保険が適用されない治療が多い。体外受精も適用外で、1回当たり約35〜50万円(県内の目安)の高額な治療費がかかる。加えて、排卵を誘

(中野由梨)